

現在の大沼ふるさとの森となつた元ゴルフ場計画地の森林は、長年手入れされておらず、枯死木・危険木だらけだったり、木々が密集して荒れた状態でした。危険木の除去や修景伐採をすすめる森の中に入れるよ

個人ベースでスタートした活動のほかに、専門家たちが活動を牽引して地域の人々を引き寄せていった例もあります。「大沼流山森づくりネットワーク」は、平成25年に大沼ふるさとの森を所有するJR北海道、農業生産法人の株式会社流山、NPO法人大沼・駒ヶ岳ふるさとづくりセンターの3団体が設立。約100haの森が地域の里山林となり、地元と周辺都市双方の住民に関わってもらえるしくみづくりを目的に、森林の整備や資源の利用、環境教育といった活動を行っています。

同ネットワークが丸太搬出に採用しているホースロギング(馬搬)も、注目を浴びている取り組みのひとつです。小回りが利き、林床を傷めにくく、化石燃料の使用を減らし、地元に残る林業技術の継承と雇用拡大もできるという利点の多い集材方法で、関心を持つ多くの団体が視察に来訪。伐採・集材・薪割りとも木の利用の流れが体験でき、馬

うになってから、樹液の採取や薪の生産を行うほか、道外の小学生がキャンプに訪れたり、地域の親子が自然体験活動プログラムに参加したりと、多くの人々が集まる森になりました。平成23年から毎年開催している木育フェスタは、いまや600人を超す参加者を集める一大イベントです。

パプルの遺産を緑に変える
専門家と住民が協働で環境保全
[大沼流山森づくりネットワーク]



地元のようちえんが森づくり体験で、木を伐採した後に、馬が丸太をひくの見学している様子。

とも触れ合えるとあって、子どもたちにも人気です。林間放牧の馬が佇む美しい風景、楽しいアクティビティやイ

ベント、おいしい食べ物など、大沼の里山林は人々を引きつけてやまない場所となっています。



造成途中の炭窯。昔ながらの土と石だけで作る。

仕事づくりで里山復活
森から生まれた事業創生の芽
[ペーバンフォレストサービス]

移住者グループが地域の森林資源を活用した仕事の創出に踏み出したのがペーバンフォレストサービスです。

ペーバンとは、旭川市東旭川町のペーバン川流域の豊田・米原・瑞穂の3地区の総称。自然豊かなエリアですが過疎化・高齢化が急速に進んでいます。一方で移住者がこの地を選んでも積雪期の仕事に不安定などの理由で離れてしまう例が少なくありませんでした。

そこで同地区に住む移住者有志が結束し、平成27年にペーバンフォレストサービスを設立。新しい仕事を創る取り組みをスタートさせました。

林業、農業などで働くメンバーは、副業としてのワークシェアリングが可能で、地域の景観や環境の保全にも役立つ林業での仕事づくりを検討し、あま



チェーンソー製材機での板づくり。炭小屋の部材も山から出た木で自作する。

り活用されていなかった個人所有の山林に着目。1年目は所有者から要望などを丁寧聞き取って潜在的ニーズを探り、歩道の整備や枯損木を薪にするといった活動を行いました。また、情報収集中に縁ができた白老町の炭焼き職人のもとで約8カ月修行。その経験から、薪・炭・ほだ木と二本の木を根元から枝先まで二切捨てることなく加工でき、製造過程で生じる木酢液や灰さえ商品になる炭焼きこそ、里山の有効活用

に最適な仕事と位置付けました。それを受け、2年目はペーバンでの炭づくりに着手。3年目の平成29年は、炭窯の完成と良質な木炭の安定生産を目指しています。取り組みを評価した山林所有者からは森林資源の活用に対する新たな意見が聞かれるようになり、能動的に関わってもらえるようになりまし

た。事業の継続には、薪炭の原料となる原木の確保が不可欠です。今後必要となってくる森林組合などの林業事業者や地域住民との関係構築には、実績を見せることが最短と考え、製品の質を高め、お金を生み出す商売として軌道に乗せることに注力。移住者には安定した職を、山林所有者には原木の対価を、地域には産業の活性化をもたらす新しい事業が、ペーバンの里山で動き始めています。

[硫酸山の森を育てる会]

会員11名。年会費3,500円。プロジェクトの歩みは、無料の電子書籍「硫酸山再生記」(パブ <http://p.booklog.jp/>)に詳しい。
<http://www.d1.dion.ne.jp/~watabonz/>

[ペーバンフォレストサービス]

メンバーは道内外から移住してきた6名で、うち4名が山林を所有し、その総面積は約10ha。今後は薪炭生産等で収益をあげ、自立した運営を目指す。

[大沼流山森づくりネットワーク]

活動資金は、主に薪原木・薪、野草茶の原料、樹液などの林産物販売で獲得。交付金なども受けながら、今後は会費制度の導入も検討している。